



ステラ・マリスの手記

これほど美しい星空に出逢ったのは初めてだ。

今は英国から祖国へと向かう船旅の最中、海は凜ぎ不思議と静かな晩だ。水平線まで広がる満天の星は宝石のような輝きを放ち、地上を見下ろしている。

星ステラ・マリスの海。そんな言葉か頭をよぎる。

広がる美しい海を、弟と見たこの空を、私は決して忘れないだろう。

——一九〇二年九月二日 船上にて

* * *

二階にあるサンルームの窓際に置かれた美しい木目の椅子は、兄さんが僕に作った特等席だ。窓の向こうには見慣れた神戸の居留地と深い青色の海が広がり、花の香りを携えた朝が、穏やかな一日の目覚めを告げている。僕は窓辺に寄りかかり、庭に植えられた満開

の桜の花をぼんやりと眺めていた。

「おはよう、史^{ふひと}」

振り返ると、兄さんがあくびを噛みしめながら部屋へ入ってくるところだった。朝食の乗った銀製のお盆を両手で掲げ、左脇には立派な装丁の手記を抱えている。

「おはよう、兄さん」

丸テーブルへと向かう姿を視線で追いながら、挨拶を返した。そして、一拍を置いてから、すっかり日課となった質問を投げかけた。

「記憶の調子はどう？」

「よくわからないけれど、これは良くないだろうね」

「……やっぱり忘れてるんだね」

顔をしかめた僕に、彼はなだめるように手を振り、テーブルに置いた手記の表紙を撫でた。

「この手記が私の記憶の代わりだから、問題はないよ」

微笑を浮かべる兄さん。まったく暢気なものだ、と僕は長いため息をついた。

兄さんはティーポットから香り高い紅茶をティーカップに注ぎ、時折サンドウィッチを齧りながら手記を読み始めた。ひとつひとつの所作は優雅なもので、どこかミステリアス

な雰囲気をまとう。兄さんは今何を思っているのだろう。ふとそんな考えが頭を過ぎった。

兄——篤坂朗は、己の記憶を保つことができない。

三年前のことである。英国から日本への航路の途中、ふたりの乗った蒸気船は不幸にも海難事故にあった。船が沈没した悲惨な事故。乗客や乗組員のほとんどが溺れ死んでしまい、奇跡的に生き残ったのはわずか十名だった。目を閉じれば、助けを求める声や傾いてゆく船の感覚、海面に打ち付けられた瞬間の冷たさと息苦しさをありありと思い出すことができる。

命は助かったが、脳に損傷を受けて健忘症を発症したのだ、と医者は言った。兄さんは、事故以前の記憶をほぼ全て失くしてしまっていた。そして眠ると記憶喪失を起こすようになった。彼の記憶はもつても一日だ。

くぐもつた小さな笑い声に、ふと現実へと引き戻される。兄さんは堪えるように、手のひらを口元に寄せていた。

「どうしたの？」

「いや、時折この手記には笑ってしまうようなことが書かれているものだから」

頁をめくる指先は懐かしむように優しくで、まるで大切な何かを思い出そうとしているようでもある。



夕星とキネオラマ

淡い茜色の空が東から迫り来る群青に飲み込まれ、凌雲閣の真上に星が二つ三つと瞬き始める帝都、東京。

曆が冬に近付くにつれ日暮れは早くなり、耳を横切る夜風は段々と冷たくなっていく。しかしながらこの街の夜は眠ることを知らないようで、人の行き交う通りからひょうたん池のほど近くに佇んだまま、齋木綾彦はここにいることをそろそろ後悔し始めようとしていた。

ここ浅草六区は賑やかな歓楽街である。建ち並ぶ芝居小屋に活動写真館、劇場には色鮮やかな看板や幟のぼりが立ち、呼び込みの声が高々と響き、行き交う人々は皆和やかに看板を見上げては話に花を咲かせている。ときおり誰かの罵声が飛んだりもするが、すぐに声の波に飲み込まれていく。普段は寄宿先と大学を往復するだけで、外出を減多にしない苦学生の綾彦にとっては馴染みのない場所だった。

ちかちかと照らし出される看板には、あるものは歌舞伎役者が口を一文字に引き結んで睨みを利かせているものであったり、外国人の男女が熱っぽく見つめあうものであったり、はたまた「キネオラマ」と大きく赤字で書かれたものもあり、情報がめまぐるしい。

綾彦は酔いそうな気分になって看板から目を逸らし、大きく息を吐き出した。目の前を身を寄せ合った数人の婦女子が、くすくす笑いながらちらりとこちらに視線を寄こし通り

過ぎていく。流行の耳隠しと薄化粧、大柄の花が咲き乱れる着物——こんな時間にこの辺りで出歩いているということは、劇場の女優かカフェーの女給だろうか。いったい何が可笑しいのだ、とうんざりした気持ちで目をすぼめたとき、ふいに肩を叩かれた。

「やあ、お待たせ」

振り返ると、その男は悪ぶれもせず、整った歯をとちらりと見せて笑って見せた。

大須賀恭宣おおすけがゆきのぶは数少ない綾彦の級友だ。裕福な男爵家の三男坊である彼は、仕立ての良さそうな三つ揃えのスーツに洒落た帽子を被っていた。涼しげな目元の二枚目の風貌も相まって、いまどきのモダン・ボーイといった感じだ。

「遅いぞ。帰ろうと思っていたところだ」

肩に置かれた手を乱暴に振り解くと、彼は悪びれもせずに肩を疎めた。

「すまんすまん、そう怒るな。今夜は後悔はさせないからさ。ほれ、これが入場券」

「……もう既に後悔しているんだがな」

綾彦はため息をつきながら、友人が差し出した二枚の入場券の片方を受け取る。そこには『キネマ座』の文字と指定席の番号が書かれていた。演目の名前を見つめながら、やはり断ればよかったかもしれない、と綾彦は複雑そうに眉を寄せた。

* * *

事の始まりは、帝大図書館のことだった。

分厚い洋書に顔を伏せ、次に提出する論文に頭を悩ませていると、本棚の向こうから現れた大須賀がきらきらと目を輝かせて向かいの席に着くなり、

「綾彦よ、大事件だ」

とこっそり囁きかけてきた。


思考を邪魔された綾彦は、胡散臭そうに友人を見上げた。この男の言う大事件はおおかたどうでもよいことであるのだと、経験から知っていたのだ。

「どうせくだらないことなのだろう」

そう言って再び論文へと視線を戻した時、素早い動作で広げていたノートを取り上げられたので、綾彦はむっと顔をしかめた。

「君は少しくらい、大親友の話を聞こうという優しさはないのか！」

「いつから俺とお前は親友になったんだ？ 悪い事は言わん、そのノートを返せ」



怪盗は月と
ワルツを踊る

ヴィオロンの音色が華やかな舞踏室を満たしていく。

シャンデリアが照らすホールの真ん中へ数人の紳士たちが淑女たちを誘い、管弦楽の調に乗ってステップを踏み出した。四分の三拍子の音楽。優美なるワルツだ。淑女たちはレースをあしらったドレスと煌びやかな宝石で着飾り、紳士たちは燕尾服に身を包んでいる。

舞踏室の隅の柱に隠れるように立っていた彼は、皮肉な笑みを押し隠して、その様子を見つめていた。此処にどれほどの思惑と虚栄が渦巻いているのだろう。

今宵は北大路子爵きたおおじが主催する、年に一度の大々的な舞踏会。

迎賓館として建てられた瀟洒な洋館の大舞踏室に集まるのは華族に政治家、官僚、軍人、資産家といった上流階級の者たちだ。そして彼も、若くして成功した実業家の青年の仮面を被ってこの舞踏会に潜り込んでいた。その優男の風貌は令嬢たちの視線を集めるには十分だが、誰一人声をかけぬのは母親たちの監視の目があるからだろう。彼は微笑を崩すことなく、けれど内心はすっかり辟易としていた。

不意に、影のようにひとりの紳士が隣に立った。

引き締まった長身を包む燕尾服には皺ひとつなく、その立ち姿には一分の隙もなかった。灰色の混じる黒髪を丁寧に撫でつけ、細められた目は鋭い光を宿している。整った顔

立ち方は、年齢を重ねた今も衰えることはないようで、顔の皺ひとつにおいてもその造形は彫刻めいていた。

紳士は視線をホールの中央に向けたまま、僅かに口を動かした。

「君は北大路子爵家の幽霊の話を知っているかね？」

「ええ、満月の夜に白い幽霊が現れるとか」

表情を変えることなく、視線を隅に飾られた伊万里焼の花瓶へと向けながら彼は答えた。大輪の白い薔薇が柔らかな香りをたゆたわせて活けられている。その一本を抜き、白手袋の掌の中で弄ぶ。

「ああ、今宵は満月でしたね」

彼はどこかわざとらしく肩を小さく竦めてみせた。

「幽霊に惑わされぬことだ——《月影》」

低いささやきが耳に届くと同時に、音楽が止んだ。

視線を隣へ滑らせれば、紳士はもうそこにはいなかった。まったく相も変わらず謎の多い伯爵様だ、と彼は呆れながら薔薇を左胸に飾った。

ホールの中で紳士淑女が立ち替わっていく。その瞬間に乗じて、密やかに舞踏室を出た。

再開された音楽は、薄暗い廊下に微かに届いた。臙脂色のカーペットの敷かれた長い廊下を音もなく進みながら、彼は頭の中で屋敷の見取り図を広げた。迎賓館の隣に立つ北大路家の本館も欧米趣味な子爵らしく、趣向を凝らした立派な洋風建築であった。ふたつの館を繋ぐ外廊下に出ると、群青の空高くにかかった銀色の満月が、辺りを照らし出していた。

冴え冴えと輝く月が落とす影の中に潜むようにして、本館へと足を踏み入れる。熱気を含んだ迎賓館とは違う、冷ややかで閑寂とした空気が無人の廊下を満たしていた。

緩やかに廊下を進むと、硝子戸の開かれたサンルームに人の気配があることに気づいた。一瞬全神経が泡立つ。けれど、感じることできるそのあまりにも儂く不確かな気配に、彼はすぐに眉をひそめた。それでもサンルームへと向かうことにしたのは、はたしてただの好奇心からか、それとも運命だったからか。

天井も壁も硝子張りのその一室は、月に照らされていた。

淡い光が目前に広がり、目を細める。

そして、瞳に映り込んだ光景に息を呑んだ。

——満月の夜の白い幽霊。



レ
デ
ィ
・
シ
ヤ
ル
ロ
ツ
テ

その古城は連なる山脈の麓の小高い丘に、まるで外の世界を拒むように建てられていた。主の居ぬ城は月日とともに荒れ、雨雪にさらされ屋根が崩れた塔は不気味に聳え、硝子の割れた窓に吹き込む冷たい風は女の泣き声のようであった。庭は荒れ果てて蔦が壁を覆い、かつてあったはずの栄華をも飲み込んだ。

夜には町に影を落とすその蒼然たる姿を、恐れ疎むのは仕方のないことなのだろう。ひとびとは口々に囁く。

——『人形の館』に近づいてはならぬ。近づけば帰ってこれぬ、と。

良からぬ噂は、時間とともに事実を風化させていく。かつてこの城に住んでいた少女の存在をも、そうして葬り去ろうとするのだ。

これは悲しくも美しい少女『シャルロツテ』の半生にまつわる物語——

* * *

半世紀前へと時を遡ろう。産業革命が瞬く間に人々の生活を変化させていった時代。貴

族たちの栄華にわずかな陰りが差し始めたそんな時代。

その頃の城は、領主であるさる伯爵の邸宅だった。無数の薔薇が咲き乱れ、金糸雀が歌を紡ぎ、四季の移ろいが美しい庭園。館の白い漆喰の壁は、遠くでも自ら光を含んだように眩しく美しかった。

その城をみる者は、その場所を『楽園』と呼んだだろう。

そんな楽園に、美しい少女が伯爵とともに暮らしていた。

少女の名はシャルロットという。

伯爵が都で花売りをする幼い娘を見初め、城に招いたのだ。

彼は少女を完璧な淑女になるよう教育を施した。言葉遣いのひとつひとつから、細やかなマナー、外国語や音楽などの教養。そして指先から足の先まで完璧に叩き込まれた所作。身につけられた美しく気品のある立ち振る舞いと笑うと愛嬌のある表情、そしてブロンドの髪とサファイアのように輝く青い瞳を伯爵は愛した。数年前に妻を喪^{うしな}つた伯爵にとつて、若々しく純粹無垢なシャルロットは再生の象徴だったのだろう。

伯爵は有り余る富で、シャルロットに何不自由ない生活を与えた。少女の部屋には色とりどりのドレスと宝石装飾、香り高い花々、巧妙に作られた人形たちで溢れていた。贅沢とも呼べる生活の中、それでもシャルロットは我侷な娘になることなく、優しく聡明な娘

に成長していった。彼女は敬虔な教徒であり、毎夜伯爵への感謝を込めたお祈りを欠かすことはなかった。

それでも、少女には許されることがあった。

伯爵はシャルロットへの執着を隠すことはなく、彼女の行動を制限した。塔のある西館に少女を軟禁し、部屋の鍵は伯爵が管理した。庭へも伯爵と一緒にでなければ出ることは出来ず、屋敷内を自由に歩くことも召使たちと話すことも制限された。

伯爵はシャルロットの心と軀からだを己だけのものにしたかったのだろう。

時折、気まぐれに伯爵は少女を部屋に一日中閉じ込めることもあった。けれど、狂気をはらんだ伯爵の行動さえ、シャルロットは受け入れた。慈悲深い少女は、伯爵の心に巢食う孤独感を知っていたのだ。

けれど、数日に渡り部屋に閉じ込められたとき、彼女の心に小さな恐れが落とされた。誰とも話すことが出来ず、部屋の窓から見える薔薇園の花たちを愛でることもできないシャルロットは、静かに涙を流した。飢えと寂しさは次第に狂気となり、シャルロットの心を蝕んでゆく。

それでも、鍵を開けた後の伯爵はひどく優しくなった。

彼女を抱きしめ、許しを請う。



ピアノ
ニスト
の
恋

路面電車の揺れに身を任せ、窓から見える景色を眺めていた。

二十世紀となっても、この大都市は記憶の中と何ら変わらないうるようだった。新市街の整然と建ち並ぶネオ・ルネッサンス様式の美しい建築物の真上には晴れ渡った秋の空が広がっている。広い通りでは馬車と目新しい自動車走り、遊歩道には長いコートを着込んだ婦人やハットに杖を携えた紳士が行き交う。

思えば、ここを離れて六年の月日が経った。

この街を最後に見たのは十七の時だったか。それからのめまぐるしい人生のせいなのか、ずっと昔の出来事のように感じられる。今になってどうして街を訪れようと思いついたのか、自分でも不思議だった。ただ少し、故郷と呼べるこの場所がふと懐かしくなった、とでも言えればいいのだろうか。

ドイツでの公演を終え、拠点にしているフランスに戻る前に訪問してみよう、そう考えただけのこと。まるで思い立って寄り道をするかように。けれど心の奥に、あのひとに逢えるのでは、という思いがあったことも事実。

あのひとは今どうしているのだろうか。私に逢ったら、どんな顔をするのだろうか。

やがて目的の場所に近づき、停留所で下りた。遠くで教会の鐘が響いている。発車した路面電車を視線で見送った。背中からもうすぐ訪れる冬を示唆するような冷たい風が吹

き、私は風に攫われないようにと帽子を押しさえコートの際を立てて歩き出した。

歩きなれたこの並木を忘れるはずもない。落ちた黄色い葉が黄金の道を作り出し、子供たちが葉を蹴り上げ、けたけたと笑い声を上げて風と共に通り過ぎてゆく。上流階級層の住まいが建ち並ぶ住宅街であるこの区画は、記憶と変わらず美しく整えられていた。

中央の公園を横切り、街角に立っていた花売りの少女をみとめて、花束をひとつ買った。それを片手に抱え記憶に焼き付いた道順をゆるやかに進んでいくと、白壁のテラスハウスが並んだ通りに出た。おとなう屋敷は二つ先にあった。

短い階段を上がり、一つ深呼吸をしてその屋敷のノッカーを叩いた。
暫く待っていると中からノブを回す音がした。

現れたのは中年の女性だった。群青色のドレスと白髪が混じった髪をひつつめた出で立ち、その顔は記憶よりも皺が増えたようだったが、懐かしい姿に私は嬉しくなり、驚いたように動きを留めた彼女に「やあ」と声をかけた。

すると彼女は「まあ、坊ちゃま！」とますます目を丸め、確かめるように私を上から下まで眺めた。懐かしい呼ばれ方に、わずかに苦笑を浮かべる。幼い頃から見知った間柄のように私の世話をしてくれたのだ。きっと彼女にとって、私は小さい頃から変わらず『坊

「ちゃま」なのだ。

けれど、成人男性となった私を見て、彼女は軽く頭を下げた。

「ご立派におなりあそばしましたね。遠くからですが、ときおり、お噂を耳にいたしておりました」

「いやだな、そんなに畏まられても困るよ」

にこりと笑うと、彼女は眩しそうに私を見上げて、「ほんとうにご立派になったこと」とどこか誇らしげな声でしみじみと呟いた。

屋敷の中へと案内され、彼女は私のコートと帽子を預かって、少し会話を交わしながら廊下を進んだ。どこへ向かうかは知っていた。この先には私が一番長く過ごした音楽室があるのだ。

「奥様も坊ちゃまに逢うことを楽しみにしておられましたよ。連絡をいただいたときはとても嬉しそうで」

「突然の訪問で、迷惑ではないかと心配だったのだけど」

すると彼女は振り返って、「あなたの心は変わっていないのですね」とまるで思考を読んだかのように悲しげな表情をした。

私は驚いて足を止めた。